

今年は  
「学びなおし」に  
チャレンジしよう！

府中市生涯学習センター

# 生涯 楽習 だより

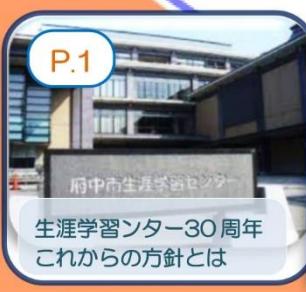
第82号

2023年1月1日 発行

<早春号>

企画・編集：府中市生涯学習ボランティア「悠学の会」  
共同発行：府中市文化スポーツ部文化生涯学習課  
ふちゅう生涯学習センター共同事業体

P.1



生涯学習センター30周年  
これからの方針とは

P.2



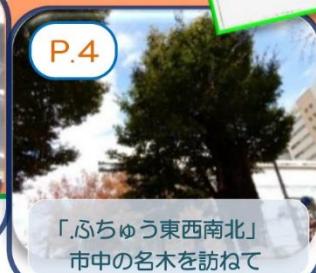
「植物画の会」の紹介  
『楽習だより』の温故知新

P.3



インタビュー  
府中「第九」三浦事務局長

P.4



「ふちゅう東西南北」  
市中の名木を訪ねて

早春の花

1月：福寿草  
2月：ヤブコウジ  
3月：ネコヤナギ

<作品提供>  
植物画の会  
☆本紙P.2に会の紹介

さらに発展させていけるよう、定期 講座をはじめ、ワークショップ、イベント等創造的なプログラムを提供し、市民のみなさんの学びを支えていきたいと思っています。

さらに、府中市が推進する「学び返し」（みずから学んだこと、身に着けたものを、社会や地域に還元すること）のお手伝いが出来るよう、今後も市民にとって重要な生涯学習拠点でありつづけたいと思います。

生涯学習センター

## 表紙のつぶやき

今年は「学びなおし」にチャレンジしよう！

「温故知新・故（ふるき）を訪ねて新しきを知る」という言葉があります。その意味は「前に学んだことや昔の事柄をもう一度調べたり考えたりして、新たな道理や知識を見い出し自分のものとすること」。学び直しはこの精神でやってみましょう！

“昔はこんな夢を持っていたな～” “こんなことにチャレンジして挫折したな～” “これは三日坊主だったな～”など、誰でも心当たりはありますね。これを手掛かりに、今年は学びなおしの年にしてはいかがでしょう。「学びなおし」で「学び返し」、Withコロナでも一歩前進です。 生涯学習だより編集部



浅間山から富士山と生涯学習センター（手前の建物）を望む

一月



二月



三月





# 生涯学習センターを中心に活動する 自主グループの紹介

今回は、この号から表紙の挿画を担当する絵画グループ「植物画の会」を紹介します。

## 絵画サークル 植物画の会

「植物画の会」は、生涯学習センターの講座「やさしい植物画」(10回コース)の受講生が平成6年に立ち上げたサークルで、今年で30年目になります。

植物画はボタニカルアートとも呼ばれ、植物学「BOTANY」と絵画「ART」を合わせた言葉です。学術的に誤りがないように草花をよく観察し、鉛筆でスケッチしてから透明水彩の絵の具で彩色していきます。(右写真下)

活動は月1回で、会員は各自好みのモチーフを選び、技量に合わせて制作を行って持ち寄ります。西山先生は全員の個性豊かな作品に対し、構図から彩色、そして額装までアドバイスしてくださいます。植物の持つ美しさが1枚の絵の上に表現されていく過程を見合うのは、楽しいひと時です。

会の展覧会は、年1回生涯学習センターで行います。

\*只今会員を募集中！ぜひ気楽に覗いてみてください。



**活動場所:** 生涯学習センター

**活動日:** 月1回 (第2金曜日)

**指導者:** 西山敦子先生

(ボタニカルアーティスト)

**【連絡先】** 千葉 042-365-8893

## 悠学短信

### 『生涯学習だより』も温故知新！ 創刊号からの歩みを振り返った



創刊号

2002年9月刊



第56号

カラー化始まる



第60号

第60号記念号



第66号～

表紙に大型写真



臨時増刊号

コロナ禍の過ごし方  
を特集(WEB版)



74号～

表紙挿画に  
市民作品採用



最新号

2023年は  
「学びなおし」が  
テーマ

「学びなおし」のきっかけは温故知新、過去の自分を振り返ることだと思います。編集部もバックナンバーを訪ねて、新しい発見がないか、その歩みを振り返ってみました。(上記) そして発見！今年のテーマ「学びなおし」について書かれた文章が、2017年7月発行の第60号記念号にありました！

これからも、先輩を見習い、生涯学習に役立つタイムリーな情報を届けていきたいと思います。

#### 《再録》「悠学の会」との出会い 編集部 根岸光紀

私は「悠学の会」との出会いは、退職後2年目の平成17年のことでした。家の粗大ゴミになる前に何か自分にできる事は、と考えているときに、広報ふちゅうで生涯学習センターでの講座があることを知りました。何回か通ううちに気になったのは、講座のあるたびに手伝いをされるボランティアの方達の存在でした。ある日学習センターの窓口を訪ねボランティアの件をお聞きしたところ、「たまたま今日情報紙作成グループの活動日ですので、見学してみませんか?」と声をかけていただいたのが運のつきで、今日まできました。

その当時は6名ほどの人数でしたが、皆さんの

生き生きと活発に議論をされている姿が印象に残り、興味半分、不安半分で入会しました。活動の中で、初めて書かせていただいたのが、ふちゅう東西南北の「多磨町の歴史」で、それがきっかけで調査にご協力をいただいた地域の方達とも知り合うことが出来、その後は「府中にある街道」の話や「府中かるたの碑を訪ねて」などの記事のための現地訪問など、粗大ゴミにならずに現在に至っています。

入会からひと昔以上も経ち、おかげ様で現在は地域活動にも場が広がりましたが、このグループは私にとって大事な息抜きの場でもあり、もう少し頑張ってみようと考えています。

学びを楽しむ 学びを支える その⑯(12)

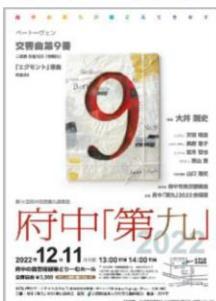
府中「第九」\* を事務局長として支える 三浦康正さん (是政在住)

3年ぶりに“府中「第九」”が昨年12月に行われました。そのご苦労や、合唱の魅力などを、長年府中「第九」に関っておられる三浦康正さんに伺いました。



コロナ禍の中の府中「第九」2022開催、大変でしたね

1984（昭和59）年の第1回からほぼ隔年で実施されてきた府中「第九」も、コロナ禍によって一昨年（2021年）は開催できず昨年に延期となりました。昨年も感染拡大の状況が劇的に改善したわけでもなかったので、開催について悩みました。マスクをしたらできるのではないかなど、条件を検討しましたが、検討の時間には



制限があります。そこで、高野市長に開催の可否についてご相談に伺いましたところ、「やりましょう。応援します」とのことでの、その後は迷うこと無く準備を進められました。ただ準備期間が短く、合唱団員を集めるのがひと苦労でした。でも、好評裏に開催でき良かったです。

ご自身も第九に参加されていますが、合唱を始められたきっかけや魅力は？

小学校3年生の時にピアノを買ってもらい練習を始めたのが音楽との出会いでした。その後、高校で合唱部に誘われ、本格的に合唱に取組みました。しかし、大学に進学した先輩たちの男声合唱を聴くと実力の違いを感じ、自分も大学生になったら、ぜひとも男声合唱をやりたいと思いました。その後進学した早稲田大学でグリークラブに入部して以来合唱を続け、今は2017年5月に結成したグリークラブ府中で活動しています。

合唱は、歌う皆がワンチームとなって連帯感と達成感を分かち合えます。これが合唱をする最大の魅力だと思います。最初に第九合唱を経験したのは高校3年生の時でした。神奈川県で演奏会の募集があって参加しましたが、そこで、「第九」というのは凄いものだと感じました。今まで歌ってきたものとは全く違う迫を感じ、それ以来「第九」が大好きになりました。

府中「第九」の事務局長としてのご苦労は?

府中市市制 30 周年を記念して、府中市先導の下に府中市民交響楽団、府中合唱連盟が集まり、1984 年 12 月に第 1 回演奏会が開催されました。その後、市民が主体となり、前述の 2 団体に、府中文化振興財団が加わった 3 団体で、府中「第九」の実行委員会を組織することになりました。なお、各回の実行委員会は、その都度 3 団体のメンバーが集まり組織されます。昨年(2022 年)の実行委員会には約 20 名が参加しています。

\*府中「第九」：「第九」とはベートーベン作曲「交響曲第九番(合唱付き)」のことで、府中市では、市民交響楽団と市民による合唱団(府中合唱連盟内と一般市民から募集)による演奏会を“府中「第九」”として隔年に開催している。合唱団には、府中市民に限らず練習に参加できる限り誰でも参加できる。このような市民合唱団は珍しい。

私自身は、1997年（第7回）から府中「第九」の合唱に参加しました。実行委員になったのは2011年（第14回）からで、事務局長は2015年（第16回）から務めています。ちなみに、実行委員会の代表と事務局長は、府中合唱連盟から、副代表は、府中市民交響楽団から選出されます。3団体間の作業や段取りについては、充分時間をかけて何回も確認し、見落としが無いようにしていますので、今までの準備段階では大きな失敗や困ったことは無かったです。あえて苦労している事といえば、合唱団員の応募者対応です。募集は、広報ふちゅうやホームページなどで行いますが、応募期間は限られています。このため、締切り後でも入団希望が寄せられることがあります。その対応に苦労します。いつまで受入可能とするか、合唱パートの人数バランスは、などを考慮しつつ、追加の入団者には急いで必要事項を連絡します。メールでは見落とされる事が心配で、電話での確認作業に追われることもあります。

合唱の参加者について教えてください

府中「第九」合唱団には、市外の方は何人までという制限はありません。どなたでも参加できるとても開かれた合唱団となっています。都内 23 区は勿論、遠くは群馬県からの参加者もおられます。移動時間の制約から、練習は土曜日のみに参加されています。

年齢層も幅広いです。小学校6年生(保護者が必要)から、第九は100回以上歌ったという90歳を超える方まで参加されました。



## 府中の音楽関係者として誇りに思うことは？

立派な合唱の練習場所が多数あることはとても羨ましいと、市外の方からよく言われます。府中の森芸術劇場には、約 2000 名収容のどりーむホールに加え、ウイーンホール、ふるさとホール、平成の間があります。また、プラツツにはバルトホールもあり、様々な施設で練習や演奏会ができるることはとても贅沢なことだと思います。ありがたいことで、誇らしいですね。

今後の目標や夢はありますか？

「うたのまち府中」構想 に関する打合せもしています。特に合唱団などに属していない子供や高齢の方々が気軽に参加できて楽しめる、継続的な音楽の企画を立ち上げようと考えています。また、キャラバン隊を組んで色々な場所に出向いて、そこで出会う人達と歌を楽しむのもいいと思います。

個人的な夢としては、カーネギーホールなど、海外の有名なホール会場で歌いたいですね。

(取材: 編集部/竹村、柴田、辻、西谷)

# 古木(ふるき)を訪ねて… 名木百選をめぐってみた

府中市のキャッチフレーズは“ほっとするね 緑の府中”。その府中が選んだ名木百選がある。市民からの推薦を含めた 282 本の候補から厳選し、名木としてふさわしい 103 本の樹木が 1988 年 8 月に選定された。名木の内、樹高が 1 番高い木は高安寺のケヤキで 30m。幹回りが最大の木は 10m の矢島稻荷の大ケヤキで、この木は都内で最大のケヤキだそうだ。編集部員が市を中心部にある名木を巡ってきた。(鈴木禎治)



## 馬場大門のケヤキ並木

府中の名木といえばまず馬場大門のケヤキ並木。国指定の天然記念物。今度 700m の通りを散策して、この



通りに府中の歴史がまるごと詰まっていることを知った。

源頼家・義家父子が奥州鎮圧(1062 年)の帰り道、1000 本の苗木を寄進したのが起源と伝わる。この時の木は残っていないが、青年武将八幡太郎義家の銅像が並木の中に颯爽と立っている。江戸期には、徳川家康が関ヶ原、大阪夏冬両役の戦勝のお礼として、神社の参道の両側に馬場を献納し、ケヤキ苗を捕植した。この時の木が、主幹を失った老木(樹齢約 400 年)として数本残っている。枝を青空に向かって大きく広げるケヤキは、青年期の姿、とりわけ 5 月の新緑のころが最も美しい。晚秋の紅葉、葉が散った梢が天空に突き刺さるように伸びる冬の姿も、春への夢を膨らませる。

近年並木通りは整備され、近代的なビルが並ぶが、歩道脇にコーヒーを飲みながら談笑できる路上カフェがもう少し増えてくれると嬉しいのだが。(奥野英城)

## クスノキと柿の木が共生する名木

青空の下、名木を訪ね歩きました。いずれも大きくてどっしりとした木々で、いく世代の人たちを見守りながら大きく育ったのだなと思うと感慨深く、はじめは



細い若木をここに植えた人たちはどんな感じだったのかしらと思いました。

この中で、私は中田家のクスノキが印象深く気になったのです。この樹は庭先にどっしりと腰を下ろし大きく葉を茂らせていて存在感があるのに、幹元から柿の木が張り出してなんとも暖かい雰囲気が伝わってくるのです。クスノキが「同じ場所で養分を分け合って大きくなろうね」と言っているように思えたから。鳥か虫が柿の種子を持ってきたのかしら、楠の幹にへばりつくように根を下ろして育ったのかしらなどと想像している時間が楽しくて、からだの中にほんわかとした気持ちが伝わってきたからです。

こんな物語を感じながら名木と言われる木々を巡つたら幾つの話が聞こえてくるのか、こんな歩き方も素敵かもしれません。(辻 麻美)

**<編集後記>** あなたの「学びなおし」は自身の未来への素敵な贈り物になるのではないでしょうか?それは知的好奇心の広がりや深耕にとどまらず、生き甲斐という大切ななものに繋がる可能性もあるからです。周りを見渡すと自然、社会、日常など学びの機会は至る所にあります。昨秋、悠学の会で府中の名木を巡ったのですが、個々のユニークな着眼から学びのヒントが得られそうです。学ぼうという気持ちがあれば色々なテーマがあなたの前に現れるでしょう。(中濱敬文)

## 大國魂神社の大イチョウ

大國魂神社本殿裏の角に御神木の大イチョウがある。幹回り 9.1m、樹齢約 900~1000 年といわれている。木から垂れる気根が乳房の形に似ていること、根元に生息するニナ貝(キセル貝の一種ではないか?)を煎じて飲むと母乳の出がよくなるといわれていることから信仰の対象になってきた。永年にわたって神社の変遷を見守ってきたのだと思うと、たとえ枯れ木になつていようと厳かな風格を感じずにはいられない。また、主幹は失われていても、生い茂るヒコバエの姿は壯観だ。日に照らされて輝きながら、青空に向かって伸びている様子は、まるで「次代は私たちがしっかりと守っていきます」と言っているようで、明るい未来を予感させる。(中井博子)



## 矢島稻荷の大ケヤキ

樹齢 800 年以上のこのケヤキは、昭和 61 年に大きな外科手術をして現在の姿になった。主幹は既に朽ちたように見えるが、根元から分かれた枝は葉を繁らせている。見た目には哀れだが、調べてみると 3 度火災にあっても生き延びてきた樹だった。

その生命力は何? と気になったので再び訪れてみた。周りの民家には様々な庭木があり、若いケヤキ 2 本もあった。最近の研究では、植物もお互いに会話をしたり養分を分け合ったりと共生していることが分かってきている。術後のケヤキを若いケヤキや周りの樹木たちが支えてくれたので、老ケヤキは生きてこられたのかとも思った。

眺めていると、私の生き様を見なさい、こんな生き方もあるよと言ったように思い、愛しくなってきた。今年はケヤキにならって横に伸びてみようかな。

(山田詩子) \*写真の左奥が主幹



## 安養寺のモミノキ

大國魂神社の南、本町 1 丁目にある安養寺に行ってみた。府中街道からの山門を抜け、今は花の無い桜並木の先にモミノキ(高さ約 10m)は直に分かる。

古くこの地に来たであろう人々は、どの様な思いでこの木を見ていただろうか? 山門、本堂、どの様に、今と同じ位置だったろうかなど思い巡らせた。もちろん右手奥に現在ある東京競馬場のメインスタンドは無かつし、もっと大きく広がった空間の中にこの木の佇まいがあったと想えた。(渡邊繁雄)

